タオルもて暗く覆へる鈴虫の篭持ちて来し鈴虫如何にと

鈴虫は如何にあらむと妻が篭おきたるにわれ上より覗く

覗きたる篭の中なる鈴虫の太りてゐたり白き髭長し

篭の中の炭の上なる鈴虫が子の太りては白髭長し

新しき西瓜となすび切りて入れぬ篭の中にて鈴虫生きぬ

### 百日紅（さるすべり）の花

百日紅おおらかに伸ぶる先枝（さきえ）にしいま花付けむつぼみをぞ見む



伸ぶる枝付け根より切りて瘤をなす百日紅新枝（さるすべりにひえ）伸びて花付け

百日紅の枝付け根より切りてありしその年々の伸び思ひ出づ

付け根より切りてしにより百日紅新枝伸ぶるを知りて幾年（いくとせ）

さるすべりの枝のびきりて玉なせるつぼみ花咲く夕べとなりぬ

さるすべりの枝伸び切りて撓（たわ）みたる先枝（さきえ）につぼみ玉なす夕べ

盂蘭盆（うらぼん）の送り日なれやこの夕べ庭に出ててみるさるすべりの花

さるすべり切りて薔薇（そうび）を添へて挿す細口瓶（ほそぐちかめ）の水の届かず

## 胡瓜の花

はや九月胡瓜の花も咲き継ぎて高きに揃ふ頃となりたり

はや九月胡瓜の花の黄のいろも茎の高きに今朝は見上げし

始めての胡瓜にてあれど良く成れば鈴虫が餌にも切りて与へし

わが畑の胡瓜の花もおのづから茎高く咲き盛り過ぎゆく

小さなる胡瓜の花の黄のいろも九月の朝の陽には映ゆなれ

茎高くなりし胡瓜の吾が眼より高きに成るを朝は目守れる



目残して地這ひせる胡瓜太きをぞわれは取りたり鈴虫に遣らむ

### かきなの種

去年切りてひともと残すかきな種莢よりわれの揉みしごきけり

方二尺蒔けばはやくも芽吹きては土いちめんのみどり葉なすも

### 丘畑と丘谿と

息衝きて丘の崖道のぼるとき芒は赤く穂に立ちてあり

長葱の種なかなかに芽吹かぬに土悪きやと妻に語れる

長葱の種のはつかに芽吹きありひび割れの土透かして見たり

豌豆の種は蒔かむか土留めせる西の斜面の際より掘りぬ

去年(こぞ)の年豌豆の種わが蒔きし日頃をつとに思ひ出むとす

無花果(いちじく)の枯れたるが木の新しく今年は伸びぬふたつ実付けり

無花果のかみきり虫に食はれける根元を切れば新芽(にひめ)出づるも

いちじくの側(そば)なるところ胡蝶花(こちようげ)と雪柳咲くを雪柳除けり

除きたる雪柳はも捨てんにはわが惜しみたりわが性(さが)ならむ



わが性のなせる業(わざ)にや雪柳石ころ多きところに植ゑぬ

雪柳きのふ植ゑ替へし朝みれば水遣らなくに常のごとしも

求めたるわが土地にしてはつはつに植ゑたる木々の伸びゆきにけり

胡蝶花もわが土地にして始めての植木と思(も)へど思(おも)ひ到らず

伸びてある雪柳堀りてその白根伸ぶるを切らん鋏もちて来ず

昼飯を終へてひとりのこの我の味噌パンひとつゆっくりと食ふ

取りて来し枝豆洗ひ大鍋に盛り上がりたるに水六分目入るる

蓋をして水沸騰すころほひを計りて鍋のたぎつ湯空けぬ

湯を切りし鍋の枝豆塩ふりて両の取っ手に打ち返しけり

雨小止む丘の崖道のぼりゆくわが目の前の吾亦紅はや

吾亦紅ひともと立てる目の前の草叢にして見るはさぶしえ

ゆくりなく目の前にして立ちにける吾亦紅なり谿の草叢

あかぐろき吾亦紅ひとつわれはみて朝の雨止む丘谿のぼる

コスモスの夕陽に映えて並びたる柵を回りて丘駆け上がる



雨の止む丘のわが途駆くるみち夕陽に映ゆるコスモスの群れ

## 鈴虫鳴けり

真夜中に妻が飼ひおく鈴虫の初めて鳴くを聞きゐたりけり

九月はや八日となれる小夜更けに妻が飼ひおく鈴虫鳴けり

秋されば妻が飼ひおく鈴虫の鳴き初めにけりあはれとや云はむ

小夜更けて妻が飼ひおく鈴虫の鈴振るごとき初音聞きたり

鈴虫のまこと小さき子なりしが餌継ぎ足らへば今宵こゑ聞く

鈴虫も大人になりてあらむよと吾妻(あづま)が云へばはつかにさびし

鈴虫の九月十四日吾が妻は始めてのこゑ聞きゐたるらし

りんりんと鈴振るごとき鈴虫のこゑは朝明(あさけ)にひとつにあらず

鈴虫の明け方近く良く鳴くにより妻の寝れぬがままに　九月二十五日

鈴虫の鳴く篭もちて朝明(あさあ)けを吾妻(あづま)はつぎの廊下に出しぬ

朝夕のやうやく寒くなりきたる九月二十九日鈴虫鳴けり



## 畑仕事

われ畑に座る布団を作りおり九月の末の冷ゆる日にして

ゴムラバーふたつに折りてデニムスボン切れ端で包み凧糸で縫ふ

わが畑の床起こすとて膝つけばすなわち濡らす土とや云はむ

膝濡らす土を厭(いと)ひてささげなる乾茎(かれくき)をさへ束ねても敷く

束ねたるささげ乾茎ふたつもちてわれは置きたり両膝が前

百姓を知らぬわれなれ百姓は膝つきて土耕さむかや

わが畑の鍬入れぬ土耕やさむそのひと鍬の石を集めり

ひと列びひと列びつづ唐鍬をわれは振りつつ石を除けり

軍手なる手袋が指たちまちに穴あきてあり荒土潜るに

### 折りに触れて

わが家の柱時計の五つ打つときに六時なるを妻は嘆くも

編み棒も太くなりたり幾年を過ぎてか妻の編み物始む

編むものを問ひたりければ孫娘が「チョツキ」と妻は応へけらずや



ひと日降れる雨の小止みし夕まぐれ丘の坂道外灯ひかる

この丘の町の外灯新しくなりてあらむか青きひかり増す

この朝の丘の祠の天蓋に落つる黄葉を手取りても除く

暇ありて吾妻は旅に出でゆけり我は畑を起さむとせり

### わが娘二十一才となりて可愛ゆければ　十月九日

わが末の娘の頬のふくらみに人差し指をつけにけるかも

わが娘働くことを苦にせざる良き性もてり遅き電話あり

冬に向ふわが丘畑を起してはほうれん草の種は蒔かむか

冬を越すほうれん草の種蒔かむ腕痛みつつ畑を起せり

鈴虫の歌を作りて送り遣りて一月余り十日音沙汰もなし

陽のあたるこの公園の錦木の真紅のいろは極まりにけり

### 丘畑に憩ふ

われもまた尻こぶた当て作れるを持ちて日蔭に憩はむとせり

われもまた茂吉のごとく尻こぶた当てを作れり持ちて憩へり



此処にしてわれの向へる杉森の秀にしも啼きて烏とまれり

高低に杉森が秀の並びたるその明暗を今日みつるかも

啼き啼きてありし烏の飛び来り高梓杉の秀に止る見ゆ

真向へる杉森が秀の高低もその明暗も絵に画かま欲し

丘畑の眼間なれど梓杉の秀に止まりたる烏小さし

### 二口峡谷　十一月七日

ひと昔まへとなりたることながら二口峡谷思ひて来れり

秋保より十二キロなる道程は長かりしかないまも変らず

この峡に雨に遭ひてぞ芋煮せしひと昔まへ思はるるかな

雨に遭ひてたきぎ煙りて芋煮せるわれらが齢ひと周りせり

降り立てば峡の川邊に日は差さずわが重ね着を着れども寒し

降り立てば重ね石せる竈跡いくつかありて黒くなりゐつ

水際辺の重ね石せる竈跡早やも吾妻は鍋おかむとす

持ちてこし枯れ竹の燃え熾んなれば芋煮の鍋のはや滾り立つ



枯れ竹の円きひと節ときおりに澳火に添へり熾んなる火よ

鍋の中はやも滾れば妻とわれと座る石捜すお椀を置きて

竈の間に熾んなる火のあがるとき吾妻はわれを寫しけらずや

天然のなめこを買へば芋煮鍋なかに加へぬ旨しとや云はむ

天然のなめこも入れて豚汁の旨しとわれの残らず食ひぬ

朱紅葉残る崖路に妻立てばすなはちわれも妻を写しぬ

まなかひにそそりて立てる磐司岩の岩面のいろの何は良けむか

まなかひに仰ぐ磐司が岩が面に天つひかりは差さずてありし

天つ日のひかりはなくて磐司岩その静かなる岩肌のいろ

樹々の葉も枯れつつあれば連なれる磐司岩のいろ沈みてゐたり

静かなる磐司岩肌仰ぎみて妻としわれの安けく戻る

天つ日のひかりは差さず磐司岩おもてを白み連なれる見ゆ

紅葉過ぎし晩き二口渓谷の磐司岩邊に辿り着きにけり

秋深くなりたるものか磐司岩の表乾きて石白み見ゆ



天つ日のひかりはなくて石白む磐司が岩の貫き立てり

石白む磐司が岩の連なりをつくづくと見て妻と戻れり

## 裸木となる木槿

危ふくもわれは見過ごし行かむとす公園の木槿裸木となる

裸木となりたる木槿ならび立つ先枝に落ちずその花殻は

裸木となりて木槿の群立てる先枝に枯れし花殻落ちず

木槿はや裸木となる先枝にぞ丸く小さき花殻付くる

真直なる群枝ことごとく葉を落とす木槿先枝の細き尖りよ

木槿はや裸木となる枝先の枯るる花殻いつの日落ちむ

### 丘の上の祠路

丘の上の祠に通ふ上り路に桜黄葉は散り敷くものを

送りたる柿食ひしやと吾が問ひて御堂の中に笑ぶむ面見む

祈りてぞ祠戻れば眼下に桜並木の黄の葉麗し

黄の葉の半ば散りたる祠路の桜並木の諸枝見えくる



散りがてぬ栗の木の葉も漸くに落ちつつ年も暮れゆくものか

四日寝ねてわが降りて来し丘谿の枯れ葉のうへの霜こそよけれ

朝霜はこの丘谿のひむがしの斜面にありて輝きにけり

わがひと世この丘にしも終はりなむこれの草木をいとほしみけり

### 愛車（サニー一二〇〇）を廃車せんとして　十二月二十七日

十二年われの乗りたる車をぞ廃車にせんと水洗ひせり

洗ひたる水の滴の玉なせる車を門に寄せにけるかも

暖かき冬のひかりは差しながら滴に光るくるま撮(うつ)しぬ

洗ひ終へ水の滴の玉なしてフロントに置く車出(い)だせり

十二年われの乗りたる自動車を廃車せむとす朝をさびしむ

十二年の月日の重み争へずわれのくるまは負ひてあるらし

わが妻のふと漏らしたる「可哀想う」その言の葉に何をか云はむ

十二年使ひたる鍵われひとつ取りて残せり飾り置かむか



## 昭和六十三年

### 折りに触れて

五體字類引きて三十年索引の頁摩耗すなる歌貴(たふと)かり

肉厚き茶碗のなかの梅干を含(ふふ)みてわれは歌編み初(そ)めむ

梅干のむらさき紫蘇の葉を浸す熱き湯飲みて歌編み初めむ

覆ひたるガラスの箱の土のなか鈴虫の子は生(あ)れてあらむか

道の傍の溝に転がる松かさも拾ひて生るる鈴虫に遣らむ

きさらぎの終らむとして一叢の篠竹に差す朝日拝む

穏やかなるこころとなりて今朝の朝明け吾妻が云へることに答へり

### 日輪

はや卯月朝を籠れる霧深く丘のうへなる日輪白し

丘のうへに朧の白き陽はありてはじめて深き朝霧込めし

朝霧の深く籠れる丘をゆきてときに日輪白く小さし



朝霧の深きがうへの日輪の白きはときに黄光発す

わが白き日輪を見るたまゆらを黄なるひかり目くらます

日輪は白くなりつつまたさらに黄金光を賜るならむ

朝霧の籠るがなかの雲の行きこの日輪を変幻せしむ

### 折りに触れて

胃の痛み漸くなくて今朝はあればわが髪短く切らむと思へり

むくげ葉の浅黄となりて輝ける五月のゆかむ朝を歩めり

児が残す紺の作業衣襟立ててわが着つつ梅雨の日暮るる

梅雨明けずありて鉄砲百合の花咲けば仏壇に妻の掲ぐる

その一枝切りて挿したる仏壇の鉄砲百合の花大きく見ゆる

仏壇の線香立の位置を替へ「クールボヂヤ」なるメロンを供へぬ

額突けば祠み前の後方より山百合ひとつ覗きてゐたり



平成元年

八月三日頃

わが病癒えつつあれば丘歩む八月三日合歓の花濡れて

八月の雨に濡れをり合歓の木のうすくれなゐの花に近づく

丘の上のわが通ひ路の草刈りし日も遠きかな今朝は顧みつ

丘の上のものの移ろひ早くして去年は無かりし草生ふるなり

八月の三日を過ぎてわが庭の桔梗の蕾少なくなりぬ

朝な朝なわがさ庭邊に咲き継ぎし桔梗の花や幾つ摘みけむ

茂吉が好むウインケルマンが「高貴なる単純」の語句桔梗の花に思へり

むらさきの玉なす蕾含む花びら合はせ目をしもわが目守りたり

八月の山百合咲くを遠き児に祠み前に告げむとはせし

平成元年六月二十四日（六十四才）、昔の日産リースの会社の人達と旅行しての帰り、胸の動悸あり変調を来たす。以後、続けて圧迫感などの発作あり狭心症の疑いにて、第一回の入院となる。（七月八日～七月二十五日）一時軽快し退院したが再び発作ありて第二回目（八月三十日～十二月十一日）の入院となつた。

この入院中は雑念なく歌に専念できたようである。勢い歌の数も多くそれでいて駄作も少なくなんとか此処まで辿りつけたかと読み返して満足したのであつた。



以後、入院中の折々の歌

入院、十日を臥して

病み臥して十日を経るにわが畑の胡瓜の蔓を思ひみるなり

馬苓薯も起こさずありぬ癒えてかへり唐鍬ふるふ日の待たるるも

ささげなど蒔く種のこし来りしがこの病室に梅雨明けむとす

わがこころ歌に就きゆくを嬉しみて病室に熱き番茶啜れり

病癒えてわれ帰りなば半ばなりし歌の編集慎しみてせむ

朝な朝なわがさ庭邊に咲き継ぎし桔梗の花や幾つ摘みけむ

茂吉が好むウインケルマンが「高貴なる単純」の語句桔梗の花に思へり

むらさきの玉なす蕾含む花びら合はせ目をしもわが目守りたり

八月の山百合咲くを遠き児に祠み前に告げむとはせし

平成元年六月二十四日（六十四才）、昔の日産リースの会社の人達と旅行しての帰り、胸の動悸あり変調を来たす。以後、続けて圧迫感などの発作あり狭心症の疑いにて、第一回の入院となる。（七月八日～七月二十五日）一時軽快し退院したが再び発作ありて第二回目（八月三十日～十二月十一日）の入院となつた。

この入院中は雑念なく歌に専念できたようである。勢い歌の数も多くそれでいて駄作も少なくなんとか此処まで辿りつけたかと読み返して満足したのであつた。



以後、入院中の折々の歌

入院、十日を臥して

病み臥して十日を経るにわが畑の胡瓜の蔓を思ひみるなり

馬苓薯も起こさずありぬ癒えてかへり唐鍬ふるふ日の待たるるも

ささげなど蒔く種のこし来りしがこの病室に梅雨明けむとす

わがこころ歌に就きゆくを嬉しみて病室に熱き番茶啜れり

病癒えてわれ帰りなば半ばなりし歌の編集慎しみてせむ

わが病得(え)たるにあれや思ほえず歌に就きゆくこころとなれり

聲無くて大悲心陀羅尼、甘露門この病室に幾日(いくひ)唱へし

わが庭の鉄砲百合の茎立ちの太りし花も終りてあらむ

韮(にら)の種　七月二十一日昼

昼近く冷房となる病室に種より育てし韮の苗思ふ

かすかなる種と思ひつ韮の種蒔けば育ちゆくあはれとや云はむ

かすかなる韮の種蒔きて育てしが細々しその葉思ひ出(い)づ



冬近くなりてあらむか韮の花枯れつつありし種採りたるは

花枯れし韮の種採りて封筒に入れて日付を記せしことも

病室にて　七月中旬頃

梅雨明けをラジオ告げをり病室の窓の下なる舗道のひかり

梅雨明けをラジオ告ぐれば臥して見る窓の空はも白み亙(わた)れる

腹膨るる病苦を持ちし人ありて今日のひと日を嘆き給へり

現実の此岸(こがん)に生きるうつせみのその嘆(なげ)かひはさびしきものを

七十に未だ満たねば生きむこと八十まではと云ひ給ふなり

痩せ細り腹のみ膨る現身を嘆かふこゑの今日も聞こゆる

わが入れる同室の三人みな重き病苦のありて生きゆくらしも

現身の遂のいのちを見しからにわが慎しみて生きざらめやも

このいまの此岸に生くるひとみなに神は苦しみを授け給へり

窓掛けを引けば臥しける朝眼には樽水ダムの峡の霧かも



## 蜘蛛たち、ほか　十月八日

戸開くれば身に沁む風となりにけり北窓の邊に露溜まりつつ

北窓のところどころに巣を張りし蜘蛛たちも見えず宵の冷ゆれば

北窓に寄りて巣作りせる蜘蛛の上がり下がりもはや見ざりける

常に見る低山竝の黒くなるころほひなれやひとつ鳥ゆく

ひむがしに流れゆくなる鳥ひとつはや山竝のいろ暗くして

陽の差さぬこの中庭の紫陽花の大輪枯れしままに日旧りぬ

## 北窓の邊

夕明かり移ろひゆきしたまゆらを避雷針の尖目眩かしむ

塒にし帰らん烏吹く風を速みて流る群れをなしつつ

天つ日は此処にも差すかわづかなる北窓の邊の露の朱はも

天つ日はたまゆらなれど北窓の下樋に濡るる露に差したり

寒くなりし北窓の辺に置く露にたまゆら差せり天つひかりは

山越しに風わたりゆく音さびし昼過ぎにして地震揺りてくる



ひと日吹く強き風にぞ散りにける桜並木の透けるさびしさ

今日ひと日吹きわたりくる山風に桜並木は落ち葉し止まず

今日一日吹き荒れにける木枯しに桜並木の紅葉落葉す

## 木枯らしの音

木枯しは午前二時にし興りたり通りゆくおと目覚めてぞ聞く

病院の丘のうへ吹く木枯しの音を聞きつつ臥してゐにけり

北山の峡をとほして吹く風のひびきははやも木枯らしならむ

わが娘来れるときに北窓に音ひびかせて木枯らしゆけり

部屋内のひとり退院すしばらくは空しくなりて足の爪切る

臥し居りしわれの背中を押すごとき地震はも暫し揺り続きたり

風凪ぎし午後となりたる三時過ぎ地震は寝台を揺りて来にけり

唐辛子の実

七五三の祝ひ晴れ着の女童のふたり近づくわが枕辺に

近寄りし女童畑に摘みけらし唐辛子の実を握りてゐたり



唐辛子の実の五つ六つ握りたる女の童われに近づきにけり

女の童手に握りたる唐辛子の朱実覗くを見せにけらずや

忽ちに荒れたる畑の雑草のなかにし成れる唐辛子これは

唐辛子の紅き実青き実多に成るすがたをわれは好みてゐたり

平成元年十月二十八日夜、茂吉歌集の注解の筆記終るの記ありて

日に三度枕重ねて精出しぬ歌集余白の「注」も終はらむ

この日々の僅かの時の累積も尊きものか余白埋めて

書きゆきて大き歌人の息衝きをわれ聞くほどになりにけるかも

### ひとの死にせし

霜月の時雨の雨のふる朝明けひとの死ゆくを部屋内に感ず

寝台車のうへに死にせるひと乗りて押されてぞ逝く白布拝む

ひと死せる朝はもこころ虔ましくなりて手帖に歌写しをり

うつせみのひとのいのちははや薤のうへの露とし我もおもふなり

二時間余り午睡の後は虚ろにて襟の糸屑取りてゐたりき



### 裏紙の歌

わが溜まる薬袋を切り開き紙縒りに綴じて裏紙とせり

夜半過ぎて暗き寝台に字の見えぬ歌書き下す忘れんがため

灯つけず真暗きがなか浮かびてし歌書き付くる夜ぞ増えにける

真暗きがなかに書きてしわが歌を朝明けぬれば読みてゐたれる

真夜中に灯つけずて書き下すわが裏紙の歌も増えんか

## 病室にて

土曜日の正午まもなき頃ほひを妻は蒸せし甘薯持ちて来ぬ

朝方の一区切りせる慣はしもわが身に付けば坐り直せり

明かりなくて暗きがなかに書きつけし歌を判読す朝は楽しき

この頃のわが息長く続くにも観音力を唱へざらめや

霜月の十日を過ぎし北窓に薄の白穂呆けてぞ見ゆ

臥やりつつ二十日を過ぎむはや黄に稔る遠田に差す夕明かり



宵宵を早く寝ぬれば午前二時ころよりわれの目覚むること多し

野田山の丘吹き通る木枯らしの音聞きゐたり夜半に目覚めて

真夜中に吹き起りたる木枯らしは過ぎてし後に北窓揺りぬ

木枯しのひびきを揚げて通りたる静けきあとの北窓の鳴り

木枯しの通り過ぎたるあとにして思ひ出ししごと北窓揺れり

北窓の揺ぎがありてしまらくは木枯しの止むときのさびしさ

## 白雲の行き

雲多く湧きてゐたれどその奥処(おくか)いや澄みにける青空の見ゆ

雲の行き青き空をし狭めゆき奥にしかもよ天眼つくる

澄みにける青き空をし下雲の興り興れば天眼つくる

真澄なる上空があり白雲は遠きにありと思はざらめや

雲の行き定めなけれど白雲は遠きにありて湧きてしゆくか

真澄なる上空近く白雲は湧きつつぞはや消(け)ぬれかゆかむ



白雲の下を覆ひて来る雲の曇りにぞはや真澄消ゆるも

真澄てし上空の青なくなりて薄き雲らは覆ひてくるも

## 低山並(ひくやまなみ)のいろ

わが読める歌論を閉じし午後四時の明かり消したる戸の面の暗さ

霜月も中旬に入る山並のひと山ごとの山のいろはも

山並の青める山と末枯(すが)れゆく山をし見ては日暮れとなりぬ

山並はひと山ごとにそのいろを保ちながらに夕暮れむとす

いまははや低山並の青山も末枯るる山も暮れて暗しも

此処にして低ひと山の杉木立直に立てるが際立ちて見ゆ

### 新幹線上り列車ゆく

今しもカーブ曲がらんとして眩しき前燈射しけるは新幹線上り列車なり

遠くより眩き明かり射しければカーブ大きく曲がりて来るも

機関車の大きくカーブ曲がるときその前燈のふたつを認む

カーブ曲がりきりて横向く列車には明かりぞ灯るひとつひとつに



安らなる明かりと思ひてわが見つる東京行きの列車の窓を

忽ちに一連なりの窓明かり消えゆきければ宵闇となる

### 折りに触れて

午後五時にならぬと云ふに真暗きを部屋内にありてひとりが言へり

外出に心臓食の少年が「思いきり辛いカレーライス食う」と言へり

この頃のわが慣らはしか口少し開きて息を吸ひて寝んとす

「サンルーム」までを可とするわがあゆみ歩くと云へどかくも短き

現身は死にするゆゑに幅のなき高き寝台車此処に置かるる

暑きころ杉の林と思ひしに低き落ち葉の木立見え初む

杉森のいろ浅みかも落葉樹の小さきが混じる窓を隔てて

青き葉も少なくなりて黄に枯るる棕櫚の木われの窓下に立つ

形よき松の並木の横並び青めるをこそ高きにぞ見む

わがからだいくらか良けむクリームの塗りみづからの肌吸ひ込みたれば

心電図撮ると待ちゐる廊下にてシクラメンの鉢置かるるを見つ



シクラメンの花鉢いまは置かれゐてわれに季節は移ろひゆけり

外出許可ありて

三月経て帰り来れるわが門に紅葉づる広葉かへるでを見し

霜月も中旬を過ぎ帰り来しわれに辛夷の花芽親しも

徒長枝となりて木斛も侘助も群立ちゐたり先枝みつむる

帰り来し庭に木斛も侘助も枝伸びきりて小高くなれり

桃色の八重のさざんか花盛りわれを迎へぬ庭の片辺に

## プラタナス木立

霜月は過ぎむとしつつ散る遅きプラタナス木立高きより見し

霜月は過ぎなむとしてプラタナス木立のみどり風に戦(そよ)ぐも

プラタナスの木立のみどり散りがてに霜月終はる風に戦ぐも

大方(おほかた)は落ち葉したれる病院の木立にありてプラタナス戦ぐ

プラタナスの木立の広葉残りゐて風に戦ぐをあはれみにけり

薄らなる雲の白きが淡々と夕明かりして間なく暮れゆく



薄墨の山竝のいろ濃くなれば薄らに朱(あか)き夕雲も消ゆ

霜月の終はりの朝の陽に照ればプラタナス木立いよよ黄(きい)なる

陽に映えて黄(き)のいろいよよ濃くなれるプラタナス木立透き通り来ぬ

陽に映えて黄のいろなせるプラタナス木立の許の落葉薄しも

浅緑いまだ保てる葉もありて黄葉まされる木立となりぬ

朝の陽に映えし広葉の浅みどりはつかに残るプラタナス木立は

霜月の朝のひかりに照らされしプラタナス木立透きつつぞ居る

霜月の終らむとしてありたれば黄葉目につく木立となりぬ

霜月の終らむ朝のひかり射し木立に透けりプラタナスの黄は

プラタナス木立の許の土に落つ薄ら黄葉も照らされにけり

プラタナス広葉やうやく黄に透けば木立の土に薄らに散れり

### 病室にて

熱き湯を持ちあぐみつつ昼飯(ひるいひ)のまへの番茶をわれは啜りぬ

廊下より近づき来たる音高しすなはち飯運搬(いひうんぱん)の箱車(はこぐるま)なり



音高く廊下近づく箱車幾段にしも飯の膳ならぶ

胸元の貼り薬あと掻きければわが慢性の湿疹拡(ひろ)がる

わが胸のところを変へて貼りぐすり貼り継ぎ直す皮膚負けしては

掌(たなごころ)もてかさかさとなる皮膚に浮く肋骨(あばらぼね)をば撫でてゐにけり

拭ひたる後に乾きてかちかちの皮膚にときにしてオリブ油垂らす

「ニトロダーム」なる心臓の貼りぐすり小さきをわれ尻臀(しりこぶた)に貼る

古(ふ)りにけるこの病院の立ち洗ひ便器のひとつ常に音立つ

絶えず細く水の音して古りにける立ち便壺に今日も用足す

腫れ物に触るがごときもの言ひをこの母親は少年にせり

去年の秋茹でて青々しわが畑の親子ささげをいま頃思ひぬ

朝の飯来れる膳に盛られたるささげの色に艶あらなくに

霜月を終らむ頃をこの部屋に一匹の蠅居るを憎めり

い寝んとすわれの顔にぞ襲ひくる蠅ひとつ居て殺さんとせり

この部屋に暑き頃より住み着きし蠅にあるらし衰へなくに



病院の小さきゴムの草履をも厠にわれは履き慣れにけり

## 霜月はゆかむ

赤焼けし末枯るる山に思ほえずあざやけく直に陽は射しにけり

ゆくりなく洩れ陽を受けし低山の雑木林の赤焼くるいろ

霜月の名残りならむやゆくりなく低群山に当たる陽はやさし

雲の行き北に流れて時の間を低山が辺の雑木照らしぬ

雲間より低群山にいまし陽は真当たりにけり山改まる

雲間より薄き明かりは目の当たり低群山を包みてありぬ

霜月のいよよ終らむ朝明けに霙の雨は降りたりと云ふ

プラタナス秀の辺に黄の葉はあれど裸木みせて霜月ゆかむ

昨日みてしプラタナス木立黄の葉も遠く舗道を越えて散りゐつ

みぞれ降り朝明けぬれば空晴れて遠き焼却炉の煙白しも

日毎みし低群山の高山を高館山と呼ぶとこそ聞け

此処にして高館山の頂きは檜の木立聳ゆるが見ゆ



頂きの檜木立に囲まれて御社ありとわれ知らずけり

青き空真上にありて白雲は湧きて厚しも見ゆる陽白し

あをぞらはまうへに覗きした迫る湧きぐもあつき際に陽が見ゆ

歳末となりて静かなる朝明けかプラタナスの黄さ揺るぎもせず

### 病室、その周辺

「十二月二日朝九時六分よりホルダー（俗に鞄こ」と訛つて云ふ）を付けぬ」

俗に「鞄こ」なる二十四時間心電図の調べ終はるをわれは待たなむ

検温の時を知らせる枕頭の体温計の音鳴らずてありしに

今朝の朝や体温計のいみじくも清しき音をわれに聞かせつ

ゆくりなく体温計の鳴り出ててわれに清しき音を聞かせり

同室の人等入り換わりこの日頃日中雑談のとき多くなりし

世の中の俗に馴染める二人のお話しもまた聞くべかりけり

夫の逝きしいまのうつつにその妻の「大事にしさい」と声掛け呉し

廊下にて声掛け呉れし小柄なるこの世話女房が背の君逝くも



歳末となりてことごとく空晴るる四日大安となりにけるかも

小さなる媼

杖もちて背筋伸ばしていつもいつも小さなる媼廊下を歩く

ひとに会へば僅かに笑みて会釈されぬわれに病を思はせずけり

自らは歩きながらに衰へを超えむとぞする媼賢し

小さなる媼が立ち居振舞ひは聖をさへもわが思はしむ

古への聖のごとく杖をもて歩み給へり小さき媼は

杖をもてわがみづからを歩まするひと日ひと日の尊かりける

病のこと思はしめざる振舞ひはいづれの性に基づくならむ

この日頃

日記のうらに子に便りせし下書きを今朝はもわれは再び読めり

貼りぐすり貼りたる痕の湿疹の痒くてならず朝こまごまと云ふ

三十有五年前「佐藤佐太郎歌集」にわが引きし傍線大方誤たずけり

同室のひとら午前を物言はず己が自恣なる事どもをせり



このあしたわれのからだに性欲の起りしはあはれたまゆらにして

読み終へし歌集を閉づるときにして昼のサイレンを安らに聞きつ

プラタナス高き先枝に僅かなる黄葉数ふる十四、五葉を

寒かりし夜の明けぬれば朝日射すサンルームの窓よ午前九時なり

寒かりし昨の夜明けてわれ出づるここサンルームの窓際の陽に

午前九時高くなりたるみんなみの冬のはじめの陽にあたりゐし

病院の朝のひと区切り終はるころわれの静かに手帖とり出づ

プラタナス十四、五葉の残り葉は昨日ぞ今日は七、八葉か

昭和十六年われ十六歳の十二月八日思へば奇しくかな遠き校歌還りぬ

昔より「在」に住みたる老人の語る言葉の笑まほしきかな

塩気なき菜を食ひきて三月余り今朝は二度目の丸干しいわしは旨し

三階の渡り廊下の間より今宵降り初む雪をみつむる

吹き上ぐる風うそ寒き三階の渡り廊下に雪を眺めし

わが三月余り過ごせし病院の寝台にて書きし黒のボールペン



ボールペンの黒きインクの芯はやも短くなるを握りて書けり

使ひたるボールペンの芯短きをいとほしみつつ今朝は握れり

退院の日の近くなり使ひたる黒のボールペンの芯は短き

### 退院し帰りては、キウヰの歌

忙しき侭に網戸を外せ得ずありしわが家に帰り来しかな

暖房に慣れしからだにわが家の冷たき部屋に這入り来れり

葉の枯れてあらはになりしキウヰの実かへり来しわれひと目みにけり

葉の落ちて成りしままなるキウヰの実今日の暇に妻はもぎにけり

成りしままに置きたるキウヰをもぎて来し吾妻は数ふ声に出だして

キウヰの実数ふるときにその数の何か良けんをわれは希へり

数ふれば九十三個のキウヰの実成りたることも喜びとせむ

ちちのみの父の居ませばその齢九十三になり給ひけむ

キウヰの実九十三を採りてはや年は暮れなむ畑ものもなく



歌集のことなど

朝明けぬ暗きに臥して思ひをりみづからの歌纏めんことを

作りたき自選歌集を思ひては朝のまだきにわれは楽しむ

若き日の巻頭首なれど顧みて歌の結句にこだはりて居り

わが畑にゆきて

暖かき午後の二時にしわれゆきぬわが畑如何になりたるらむと

わが畑は長く茂りて枯れにける雑草がなかに埋もれてありぬ

深々と枯れ草靡き伏す畑を驚きにつつしばし眺めし

茂りては枯れ伏しにける深草を踏みてはわれの畑に入りぬる

土留(どど)めせる境にゆきて覗きけり樹々倒されて重なりてあり

枯れ伏せる深草踏みてわれははや足許に朱(あか)き唐辛子みぬ

枯れ枯れて小さくなれる唐辛子二本(ふたもと)を折ればたはやすきかな

わが畑に長葱二列残れるが僅かに青きものと云ふべし

たはやすく枯れ果てにける唐辛子二本(ふたもと)折れるをわれは握れり



枯れ草の畑に陽、風にその朱実(あけみ)晒されければその実小さし

十二月中旬を過ぐこの畑に残る朱実をいとほしみけり

わが畑の北にありける高き樹はみな伐り倒されて谷となりゐつ

北の樹々伐られしにより四方(よも)開け見晴しのよき台地となりぬ

わが病癒えてしあればたはやすく畑はかつての日に戻りなむ

唐辛子二本を瓶にしまらくは食卓の上に置きにけるかな

### きさらぎの雨

きさらぎの十日を過ぎて静かなる夜来の雨の音ぞ聞こゆる

きさらぎの夜来の雨の止みてゐし妻は障子の桟を上げぬる

わが靴を履きつつ挿せる桃の枝の堅きつぼみを見て出でにけり

桃の枝のつぼみ堅きにきさらぎの雨となりをり朝の靴履く

暖かき朝の雨ふるきさらぎの雨と思へり靴履きながら



昨日の雪雨となりをりきさらぎの暖かくして中旬となる

桃のつぼみ未だ堅きにきさらぎの朝の雨ふる雪消えながら

### 五月中旬となる

風となる五月なかばの午後を来てマスクをせんか迷ひて歩く

風となる五月なかばの午後を来て合はせ着の襟閉じむとはせり

土留め際伸びて来りし篠笹の茎折りにけりさびしみながら

八重桜さへも散りけり校庭の水溜りにぞ濃きくれなゐや

倒れたる笹竹の束ほどきては土に挿しけり息衝きながら

豌豆の茎伸び初めて支へなき畑に靡くもあはれなりけり

わが病やうやく癒えしにより額に掲ぐ　七月初旬

わが酒よ何は兎もあれ月火の曜日は飲まず休みとせんか

結婚衣装のデモストレーションを見て　七月十五日～於古川

華やげる衣裳の娘らがゆきかへるときに吾娘をもわれは見むとす

わが前に座れる吾娘をときに見て華やかな白また赤を思へり



婚礼の華やぐ衣裳つけし娘ら行き交ふときに子を顧みつ

沈みゆくこころ励まし歌書きて四時よりわれの散歩に出づる　七月十六日夕

## 平成三年

風船かつら　ほか　九月二日～十八日

口渇き止まず詮なし午後となり風船かつらの袋実を摘む

枯れ葉いろの風船かつらの袋実のその膨れたる袋摘むわれは

夕映えの赤く差しくるわが畑の群挿す竹に蜻蛉止れり

隈も落ちず畑に挿しける篠竹の秀にし止れり夕べ蜻蛉は

あかあかと夕映ゆる畑に蜻蛉ゐて竹にとまれり十余り七つ

畑に挿す竹にあまねく蜻蛉ゐてわが憩ふとき夕明かりすも

ダアリアの茎は脆しも長雨のこの夏終はるころを幾折れ

秋雨のひと日となれりくろぐろと種実ひまわり茎立ちにけり

保育所の種実ひまわりくろぐろと茎立ちにけり秋の雨ふる

保育所の庭に茎立つひまわりのひとつ實黒し丸く大きく



秋雨のなかに盛りてコスモスは背高々と桃いろの花

細やかにそのくれなゐや二本の水引草を瓶に挿しけり　九月十八日

## 平成四年

### 庭の樹々たち

わが庭の樹々も大きくなりゐたりきさらぎころを椋鳥も来て

わが門の八つ手花枝に椋鳥の止りてその実ときに啄む

実の熟るる八つ手花茎むくどりの飛び来りては啄むことも

きさらぎの冷たき雨を避けながら高槇葉裏すずめ群れゐつ

椋鳥と雀とひとつ樹に止まりしまらくは居ることもありける

西窓の辺に置きにける瓶に挿す桐の花はも三月を過ぎぬ

桐の花三月を過ぎて密かにも息づくものかこの青瓶に

きさらぎははや過ぎゆかむ桐の花この青瓶に生きつつぞ居る

わが孫生まれ満ひと月となりて帰りければ　四月十二日昼

川渡り帰りゆく子が眉間にぞ指もて「犬」をなぞらへにけり



「直人」が眉間指もて犬をなぞらへり川渡りては帰りゆく子よ

おだまきの花咲き続きたる連想の恋ほしも朝は水遣りにけり

鉢の儘に土に埋めしおだまきの花咲き続く五月は往かむ

紀ノ川と高野山と　七月十二～十三日

和歌山の長男宅を訪ひ、高野山に詣でる。

紀ノ川の流れゆたけき岸の辺の汝が新しき部屋を愛しむ

汝が門の葵の花や紀ノ川の流れとともに忘らえぬかも

相會てまた離れては四年経ぬ汝が生きざまをつくづくと思ふ

紀ノ川の流れ背にして写したる汝が穏やけき顔をみつむる

高野槇青きを手向く風習も珍しみ見つ山深くして

桙杉の大木が許辿りゆく奥の院はや幔幕の中

奈落より読経の声す奥の院の暗き佛を拝み申す



平成五年

岸和田城下にて　十一月七日夕

かの熱きだんじり祭り思ひ出づその人垣に城見ぬことも

三人して歩くは久し岸和田の城見むと急ぐ時雨る夕べを

児等と三人時雨の雨に暮れなずむ岸和田城を尋めて来たりぬ

暮れ残る岸和田城の壁白く水鳥浮ぶを妻は告げゐつ

時雨るるも三脚据へて子の入りぬ岸和田城を撮り終りけり

わが孫の宇智が頬膨れしと聞けば嬉しもはや離りゐて

林檎剝きて皿に盛れるを運びくれし汝がやさしさも思ひみむとす

琴平、岡山、倉敷にて　十一月八日、九日

今刀比羅の宮のきざはし幾段ぞ上らむとして妻は杖もつ

竹の杖吾妻は持てり此処よりか今刀比羅参り共に上らむ

九十二段上りし妻の何か言ふわが目に映る百段の標識

きざはしのみぎりひだりに石の柵連なりてあり刻む人の名



彫り跡の力強しも紀国屋吉兵衛が柵もわが目に留めて

外壁の黒き烏城や橋の上ゆ晴れ渡りたる空のうへに見ゆ

白壁の軒さかしまに水に映る掘割り眺むあれとあがつま

晴るる日の旅は良けんか白壁の水に映るを二人して見つ

白壁の趣き似んかユトリロの白き繪の前に暫し佇む

この旅の終らむ朝けふたたびを倉敷河畔歩みて帰る

瀬戸内のままかり酢漬食しておれば旅は例へば甘酸っぱいか

## 平成六年

### 和田博行君の霊前に捧ぐ　一月十一日

若き日のからくれなゐぞ恋しきと詠み給ひける君は居ませず

いまははや去年の賀状をとりもちて詮すべ知らに嘆かふものか

共に食ひし九段が宿の小さなる櫃の中なる飯忘らえず

君が歌ふかの遠き日のふるさとの日向のくにの稗搗節よ

われら哭きて拓大校歌合唱せん夢は空しくなりてゐたりき



静かなる遂の住まひに妹を措きて過ぎにし君は涙ぐましも

大寒に向かふみちのくに生き居りてうつせみわれのさびしきろかも

### 小さなる旅　鳴子～米沢回り日帰りの旅　七月三十日

鳴子、朝九時着、早速公衆浴場「滝の湯」に入りたるによりて

古へゆ幾萬びと入り給ふこの滝の湯にわれも浸りき

木の枠の筒ながくして沸き出づる湯のあふれては口より流る

滝の湯の門に置かれし濡れ縁にふき出づる汗いくどか拭ふ

湯を出でて直ぐに真向かふ御社の道邊に赤しさるすべりのはな

硫黄の湯身にぬくもりはありながら霧雨のなか上着を羽織る

車窓より尾根づたひなる鉄塔のくろぐろと見ゆ空晴れゆけば

吹きわたる風の涼しさ橋のうへゆ最上川原の砂の白しも

直に射す日差しは暑し米沢の古き町並み辿りてゆくも

小さなる旅と云ふとも大いなる蔵王のみねの連なりもみつ



## パリからの通信　九月二十七日夕

パリからの妻が絵葉書はろばろと五日を過ぎし玄関に落つ

赫々とエッフエル塔に花火あがる絵葉書届く手に持つわれは

一行が短く切れる文面のパリの絵葉書つくづくと見る

珍しく文章よしと思ひつつ「ＴＯＫＩＫＯ」横文字サインがありて

一行が短く切れる感動の伝はりてあり「ＴＯＫＩＫＯ」サインも

快晴のパリに着きたるわが妻の飛行のあとも楽しかるらむ

夜空にぞ打ち上げられし赤と黄の花火のいろに塔は染まれり

明日ははや帰り来ん日ぞ赤く燃ゆエッフエル塔の写真みつむる

### 楓落ち葉

霜月の終はらむ週をわが門のかへるで枯れ葉散りも止まずけり

今日もわれ楓落ち葉の吹き溜まる側溝にゆくバケツを持ちて

今日もわれバケツを持ちて側溝に吹き溜まりたる落ち葉を盛るも

わが庭のひむがしにして深き穴掘らるるところ落葉を捨てつ



深き穴に落ち葉捨てをりていよよ高くふわふわとなるを手もて押し込む

柔らかき楓落葉もなくなりて霜月のはや過ぎゆきにけり

かへるでの裸木となる後にして辛夷は固き枯れ葉保てり

### 師走となりて

佗助の筒咲く白の五つ六つと増えゆけばはや師走に入れり

桃色の八重のさざんか撓わなる花付け終へぬ師走に入れば

佗助の白もさざんかの桃いろも目には新し雨後の庭に

風凪ぎて身にあたたけき祠路の朝と思へり湿る土踏む

朝明けし祠を上がるきざはしに桜落葉は片寄りにけり

時雨して朝明の祠きざはしに桜落ち葉は鎮まりにけり

桃いろのはなびら土に鏤めて八重のさざんか咲き終はりなむ

平成七年

藪柑子　四月二十八日

丘畑の傍辺沢徑群れ生ふる藪柑子の葉の深きみどりよ



澤辺なる藪柑子の葉に陽の射せばかく艶やけきみどり葉なすも

慌ただしく終はりし花よ葉桜のおん祠みち上りつめゆく

菊苗植えぬ

わが庭の日当たり最もよきところ露地植え好む菊植えにけり

いちはつとシオン移しぬその後にわが露地植えの菊六つ置く

既にして野菜屑らは土に還るその土掬ふコンポートの中

野菜屑らひと歳を経て土に還るその土の質掬ひつつ見る

菊六つ植えんとしてはわが気負い鹿沼土の黄土に流しぬ

思はぬに鹿沼土はやゆたかなる交はりをせりその諸土に

ゆたかなる鹿沼土かなひと掬ひひと掬ひして交じり合はせり

鹿沼土の眞黄なるいろ土に浮きて交じり合ひたる土を眺むる

新しきものは良きかなこの朝のわが菊苗の植えを楽しむ

輝ける五月は邁かむこの朝のわが菊鉢の六つに陽の照る



## アルペンルート、立山連峰と上高地行　十月二十二日～二十四日

厳かに立山連峰立ちませりわれの頭上に晴れ晴れとして

穏やかに風向計は動きゐて澄みわたりたる立山の峰

陽のひかり展望台に満ちたればかかる晴天を妻と喜ぶ

展望台一隅にして酒を酌むわが性さへも許さるるべし

頂きを鮮やかにして青き空かかる晴天にまた逢ふべしや

みどりなす色を湛へて鎮まれる黒部ダム湖を見下ろしにけり

立山の厳かなりし頂きのうへにぞ真澄む青き空あり

トンネルを堀り進むとき脆き地盤ありたることも聞き及びけり

しぐれくる上高地河畔河童橋ここにして見む穂高岳はや

真向かひに穂高の山はありながら霧か雲かも覆ひわたれる

雪嶺の穂高連峰仰ぎみし頃よりは過ぎぬ四十有五年

吊り橋の河童橋わたるころほひを時雨の雨の止めば傘閉づ

しぐれする上高地河畔河童橋わたり終へたりあれとあがつま



上高地河童橋辺(あた)り色づくは落葉松(からまつ)なれや妻は指差す

川砂利のうへに横たはる流木の幹のみの貌(かたち)われはみつむる

峡谷を流るる川や白波(しらなみ)の時雨るる日にも光りて見ゆる

梓弓(あずさゆみ)作りしと聞く梓なるその木思ほゆ峡谷を行けば

梓にて弓を作れる語り聞き梓の弓の歌も思はむ

喧騒(けんそう)の街中(まちなか)にあり晩秋の空に聳ゆる城の雄々しさ

夕暮るる松本城を惜しまむと赤き橋のうへあれとあがつま

とき子作

大天守乾小天守ふたつなる松本城の橋のうへに立つ

移ろひのときは過ぎなむ夕暮るる城のいろはや黒くなりゆく

忽ちに暗くなりゆく城のいろ橋のうへより見収めにけり

平成八年

祠高松　三月十日朝

雪解水したたるおとす祠路の高松林われの来れば

昨日の雪とけてあたたかきこの朝を祠高松ゆきしづくして



祠路の高松よりは雪解水したたりやまずわが肩濡らし

平成十年

花のいのち　四月十四日

紫木蓮のおほき花びらゆく道に散らひてゐたり雨に濡れつつ

花のいのち短きものかむらさきの木蓮もはや雨に濡れ落ち

丘の上の祠がさくら咲き満てば丘の半ばにわれ立ち盡す

降り続く雨に濡れたるおん祠天蓋にしもすでにはなびら

雨に濡れし庭石のいろよろしくて錦木にいま若葉付けしむ

七十三歳の誕生日に　一月二十日

短歌ひとつ出でずてありしこのわれに一月二十日誕生日のうた

大寒に吾(あ)が生(あ)れしことなにゆゑかさきはひのごと思ふことあり

一月二十日この大寒にあが生れし奇(く)しき摂理も思ひみるべく

今日の日のこの誕生日をあらしむるわが父母(ちちはは)の徳を思へり



わが家外壁　一月二十五日

甦るわが家の壁の明るけきベージュの色を嬉しみにけり

「アルカベール」なるアルミ建材外壁のベージュのいろは新しきかな

駐輪場の勤め辞めむとして

五年(いつとせ)を朝早くより起き出でて歩みし道に別れ告げなむ

仕事辞めむ思ひ抱(いだ)きて帰り来(こ)し庭に芽立ちぬ水仙の青は

折に触れて

思ひ出づかの遠き日の街角に流るる歌や「さよならはダンスの後で」

ヒヤシンス厚葉五つのなかにしも蕾の赤と黄の鉢買ふ

古墳坂谷間に咲く白梅にみぞれまじりの雨ふりかかる

はや辛夷つぼみふくらむ残月の淡き朝明の坂を下れば

今野直人君　四月五日夕

一心にプラモデル作るわが孫の今野直人に電燈寄せぬ



電燈を寄せれば図面明るくて嬉しむ孫の面を愛しむ

作り終へて変身したる飛行機を持ちし車窓の子と別れしか

暗くなりし夕べの門に舞ふ雪に飛行機翳す子と別れぬる

鳥の海ゆき　六月～七月

幾度かハリスが糸の引き抜けてやり直すかな金のチヌ針

磯竿の五・三の中通し竿の撓りを嬉しみにけり

六月十六日梅雨の晴れ間にわが行きて水門に釣る一匹のはぜ

七月十日

鳥の海の水門めざす車にて今日の干潮を驚きにけり

大潮(おほしほ)の干潮干潟(ひがた)「鳥の海」のひろき一面の海をみつむる

ゴツゴツの岩石あまた露出する堤が下に降り立ちにけり

いつもいつもこの水門のひとところ粗末なる梯子下りてゆくなり

対岸の河口に近く干潟出でて流れ細めり男指さす

この男口数多く隣せしがつと来てわれの餌付け直せり

大潮の引き潮止り鳥の海の午後の日差しに耐えて釣りする



鳥の海の水門に来て海の気配(けはい)変幻自在と云はざらめやも

昨日と今日たちまち変はる海のさま驚きにつつ竿を納めぬ

足許に怒濤となれる波撥ねぬそれをし見ては竿を納めむ

河口より押し寄せ来たるいちめんの霧はも凄し竿たたみつつ

鳥の海の水門にありて今日の日のはぜ三匹の水を流せり　七月二十五日昼

坂元の祖母九十歳となり給ひて　七月二十六日

ははそはの祖母九十になりましてはぜの佃煮食ひ給ふなり

わが釣りしはぜの佃煮旨しとて祖母は問ひ給ふはぜ釣りのこと

はぜ釣りの変幻自在の潮のこと言ひては祖母の顔をみつむる

はぜ焼きて一・二週間は干すと言へば「本式」とこそ宣らせ給ひき

### 折に触れて

タクラマカン砂漠なる語のひびき良しタクラマカン砂漠地球儀に見る

萩のはな雨に濡れをり丘のうへの祠に孫の「なおとくん」呼ぶ

雷神山古墳を望む丘のうへのひむがしにして月照りにけり



蟋蟀のか細き声も聞こえつつ雷神山古墳月照りにけり

それぞれの思ひ出ありてこの夕べ直人が作るプラモデル見る

小さけれどすかだよろしき三波石の赤に混じれる青の不思議さ

小さけれどすがたよろしき赤石の三波石汝は「女人観世音」

五社山の細き上り路ひとつ摘みし龍胆のはな帽に挿せるも　十月二十四日

五社山の頂き近く黄蝶の危うくもはや飛び立つらしも

茂吉にし「黄蝶」の歌のありたるを思ひ出つも山谷徑に

黄蝶のなよなよとして山谷の深きに下り飛び去りゆくも

五社山の頂きにありておん祠五つ天蓋の並び居ませり

下草の足結ひを濡らすおん祠通へる道も霜枯れにけり　十一月二十日

錦木の朱の朝日に耀ふをひさびさに見し朝を和めり

明けぬれば祠の桜紅葉より氷片となる雪滴して　十一月二十一日朝雪

風激し雷神山古墳おん祠天蓋にしも松葉は付くも

雷神山古墳西よりひかり射し祠天蓋を明るくしたり　十二月十七日昼過



## 平成十一年

### 佗助　三月二十一日

われ昨日、レントゲン写真にて食道にある影、以前より悪しと聞きて動揺す

わが思ひあぐねて窓に倚りければ庭石に落つ佗助ふたつ

佗助の白き花ふたつ庭石の狭間に落つをつくづくと見し

わが居間のここより見ゆる佗助の高木がなかのひとつ蕾よ

おほかたは佗助の花終はりゐて下枝に五つ六つ白き花付け